

| | |
|------------------|---|
| Title | ハワズ・タルキ著 『国家を持てなかつたパレスチナ人の苦悩』 |
| Sub Title | Fawaz Turki, The Disinherited Journal of a Palestinian Exile |
| Author | 鶴木, 眞(Tsuruki, Makoto) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1976 |
| Jtitle | 法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.2 (1976. 2) ,p.118- 121 |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19760215-0118 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Fawaz Turki,

The Disinherited

Journal of a Palestinian Exile

Monthly Review Press, 2nd Ed., 1974,

New York.

ハワーズ・タルキ著

『国家を持たなかつたパレスチナ人の苦悩』

エルサレム旧市街のダマスカス門に近い、東エルサレム中央バス駅は、アラビア人の世界である。とても、ベントツ製の代物とは信じられないエンジンを出したバスは、この世界独特の風物詩でもある。このバスを利用して、はじめて私がエリコへ向つた時、私は三つの驚愕すべき光景に目を見張つた。一つは、丘の上にそびえるエルサレムの町と目の下に広がる死海の青さであり、一つは、軽機関銃を腰に臨検のために乗り込んで来た若いイスラエル軍兵士の鋭すぎる目つきであった。そして最後の一つは、終点近くなつて道路の右手に広がるナツメ椰子の木立にかこまれた緑豊かなエリコの町と、左手に今はくずれかけ住む人のいなくなつた難民部落跡の「土の家並」である。難民部落跡は一木一草もなく、またかつて

それらがあつた様子もなく、それは見るからに隔離された世界、疎外された世界の廢虚であつた。

国連発行の難民救済ペンフレットの中に、「この人生に三度」というパレスチナ難民の日常生活を紹介している写真集がある。それは難民生活がいかにみじめなものであるか、いかに人間の自尊心を踏みにじられるものであるかを明瞭に語っている。身につけ、持ち運べる最大限のものを持ち歩いたとは言え、所詮、焼け石に水である。彼等はテントに住み、UNWRAからの食糧配給に長い列を作つた。テントは生やきのレンガの家にかわつたが、人々は貧しく衣料品は乏しく、はだし姿はめずらしくなかつた。ハワーズ・タルキも指摘しているとおりに、難民の逃げ込んだエジプト、ヨルダン、シリア、レバノンの国々は決してそれらの人々を吸収し、安定した生活を提供できる程の経済力を持ち合わせていなかった。イスラエルの支配を嫌い、恐れアラブの兄弟の地へ逃げた人々は、今度はその兄弟たるべき同じアラビア人から強い差別をうけたのである。同時に、時の流れは中近東をとりまく世界の力関係を変化させ、さらに難民の中に「新しい世代」が抬頭しはじめた。彼等、新しい世代は、Arab Identityの故に故郷を捨てた第一世代と対称的に、Palestinian Identityを強く押し出す事となつた。アラブの兄弟の地で、「よそ者」国をなくした者とののしられ、差別された難民は、自分たちの心の安寧と自尊心の回復は、自分たちがパレスチナ人である事を確認する事によつてのみもたらされるものである事を知つたのである。ここに、現在のパレスチナ政治組織とその手段的暴力の正当化のこ

ころみがなされる契機がある。

* * *

著者はPalestinian Identityは、構成要素の一つにアラブ諸政府への怒りもふくまれている事を強調する。はじめからアラブ諸国政府は、パレスチナ難民の収容に極めて消極的であつた。エジプトは難民をガザ地区に押し込め軍事管轄の下に置き、エジプトへの移住を禁じた。レバノンも難民の流入によつて社会の微妙な宗教的・種族的バランスが崩れる事を好まなかつた。……従つて、大規模な難民再定住計画は机上の空論に終る事が多かつた。それにもかかわらず、アラブ諸政府はシオニストと対決姿勢を強め、その非妥協的で融通性のなさの犠牲にさせられたのは常にパレスチナ人であつた。それでも、パレスチナ難民の新しい世代が育つてくると、少くとも彼らは前の世代程、自暴自棄的でもなかつたし悲観的でもなかつた。彼らは難民救済の恩恵や機会を受け入れ利用し、アラブ諸国の中で最も高い教育水準を誇るに至つた。とは言え、アラブ文化の一つの特徴である強い家族の絆は、これらの若い世代にもパレスチナへの帰還の願望とMinority意識をうえつけていつた。パレスチナ人の若者たちは、このようにして、アラブ世界で最も急進的な勢力となつていつた。しかし、一九五〇年代はナセルの時代であつた。アラブ諸国の指導者は大衆の関心をひきつける絶好の手段としてパレスチナの解放を叫んだが、実際の政策上の優先順位ではパレスチナ問題はいつも一番あとまわしにされた。一九六〇年代に入ると、難民

は無気力でただ憎しみにみちた状態からぬけ出して、多くの人々がより快適な生活をキャンプの外でおくれるようになった。しかし、彼らは決してその土地に再定着しようとは思わなかつた。ところが、一九六七年の六日戦争はパレスチナ人を二度目の難民にしてしまつた。そして、パレスチナ人は、アラブ諸国政府をあてにするむなしさ、世界の同情のなさを知らされた。そしてパレスチナ人は自分達自身の問題は、自分達自身の手で、自分達の目の黒いうちに解決しようとして立ち上つたのであつた。

先に述べたPalestinian Identityが中東の政治状況の中で、言わばパレスチナ人にとつて外的要因の変動の中で形成されたとするれば、もう一つの契機はパレスチナ人自身のコミュニティ内部からの湧き上るIdentity確認の動きである。パレスチナ人は難民である。難民とは「よそ者」であり「賤民」であり「アンタッチャブル」である。しかしパレスチナ人の心の奥深く抱かれた願望は時節の到来を虎視眈眈とねらつているのである。この故にこそ、彼らが如何に他からさげすまれようと、自尊心を保持できるのであり、逆にパレスチナ方言の固執や民族衣装の着用によるPalestinian Identityの誇示という形をとるのである。

これと極めて近似した心理がパレスチナ・ゲリラのテロ行為の動機となつている。即ち、パレスチナ問題は今まで、アラブ・イスラエル抗争の中で埋没させられ、現実的な定義を与えられてこなかつた。パレスチナ政治組織も自分たちだけでイスラエルをたたきつづ

す事など不可能である事を知っている。しかしゲリラによるテロ行為を行う事によつて、世界に今まで無視され、忘れ去られていたパレスチナ人の存在とその信念を示す事ができるのである。ゲリラ活動の契機も、Palestinian Identityをあらゆる階層のパレスチナ人が共有してはじめて可能となつたのである。著者は、自らの運命を自らの手で切り開く闘争をはじめたこれらの人々を「新しいパレスチナ人」と呼ぶ。そして、これらの人々の武装と暴力の後に、世界は初めてこれらの人々を「アラブ難民」とではなく、「パレスチナ人」と呼びはじめたのである。

現在パレスチナ人は二つの道のどちらを選ぶべきかの選択に直面している。即ち、パレスチナに世俗的民主国家を建設するために、
 ①現時点での解決策の志向に踏みきるか、あるいは
 ②故郷のすべての土地が解放されるまで武装闘争を続けるか、である。前者の選択をした場合一つの具体策は、現在イスラエルの軍事統治下にある、ヨルダン川西岸(West Bank)とガザ地区に、パレスチナ国家を作る事である。これらの地は、一九四八年以後、ヨルダンとエジプトに占領され、一九六七年以後はイスラエルに占領されている。しかしこの策に賛成するパレスチナの指導者はごく少い。後者の選択をした場合の具体策は言うまでもなく暴力の強化である。この際、解放への展望は①我々の世代でそれを達成するのか、②我々の息子の世代をもまぎ込むのか、で微妙に食い違ふ。

パレスチナ人にとつて、忘れてならない敵はアラブ諸国の指導者

の中にもいる。彼らは、しばしば自分達の拠つて立つ封建的社会体制を、進歩的なパレスチナ人によつて崩される事を好まないのである。パレスチナ人は叫ぶ。自分達を「アラブ難民」と呼び、「南シリア人」と呼び、「テロリスト」と呼ぶ人々、また自分達を無視し、征服し、再定住させようとする人々、さらに自分達の運命を取りひき材料にしようとする人々は、今日、世界の被抑圧者の間から怒涛の如くわき上つて来た第三世界の運動の本質を理解できない人々である。かくて著者は、Palestinian Identityは、Third World Identityの一部を構成するものであるとしている。

* * *

著者の読者像は、欧米の人々に限られている。著者は強くヨーロッパ人の持つユダヤ人への Guilty Complexを批難する。つまり、ヨーロッパ人のユダヤ人への贖罪意識が、またパレスチナの地で同様の罪をパレスチナ人に行つて犯したのであるとしている。従がつて、最も批難されるべきは、世界のなかんずくヨーロッパの、パレスチナ人無視の態度であるとしている。

しかし、こうした世界の態度に反省をうながしパレスチナ人の存在を確認させる手段として、無差別なテロ行為を正当化しようとする事は、あまりにも著者の身勝手な主張であろう。さらに、著者はパレスチナ諸政治組織の対立や、そうした対立が一般のパレスチナ人をどう巻き込んでいるのか、そしてそれが Palestinian Identityの共有にどのような影響を与えているのか全く述べていない。まし

て、パレスチナ人の自叙伝的回想が軸となつている本書から、詳細な国際関係記述を期待する事は無理であろう。従つて、本書はあくまでも *Palestinian Identity* の形成過程に注目する限りにおいて、真に興味ぶかい内容であると言える。

私はアラブーイスラエルの政治闘争の解決、即ち中東における平和の達成は、片方の全面勝利による他方の全面敗北という形では達成し得ないと思う。妥協、歩み寄りが双方に要求される。こうした中で、本書の著者が、イスラエル人の間にも、パレスチナ人の願望に目をつぶらず、パレスチナ人の実態を認識する「新しいイスラエル人」のいる事を指摘している事は心強い。もちろん、アラブ側、パレスチナ人側から見れば、これらの人々にも限界はあろう。しかし、シオニストのタカ派路線に批判的な、若いイスラエル人の存在は、必ずやイスラエル自体にとつても将来、大きく物を言う時がくると私は思う。本書の著者にたいする私の最大の不満は、ここまで論を展開しておきながら、何故、彼はセファルディ系ユダヤ人、特にアフリカ北部のアラブ圏からイスラエルに移住した人々に一切言及しなかつたのだから。パレスチナ人にとつて、これらのユダヤ人は果して連帯のあいさつを送り易い人々なのだろうか、それとも送りにくい人々なのだろうか。そして、そのいずれにしても、その理由は何なのだろうか。さらに、もう一步進めて言えば、これらのユダヤ人がイスラエルへの移住を選んだ過程でのアラブ人による差別、迫害には一切目をつぶつて、イスラエル国家存在の犯罪性を云々するならばパレスチナ人も決して被害者の立場ばかりを主張はできない。一つ

の具体的事例をあげて言うならば、一体パレスチナ人はシリアに捕われたユダヤ人をどのように見ているのだから。(昭和五十年十月)

鶴木 眞